

藤原教長論

——『古今和歌集註』の検証を中心に——

西村 洋子

藤原教長の『古今和歌集註』を具体的にその注釈内容を考察する中で、教長の注釈史上の意義を現今認められている以上に積極的に評価したいというのが私の本論文の執筆の一番大きな理由である。

そして、さらに教長の和歌観を注釈を通して探るのも一つの目的である。以上の二点を考察する上において、顕昭の『古今集註』との共通歌の具体的な比較を通じ両者の特徴を探ると共に教長の注釈態度の意義を浮かびあがらせる手法をとっている。

また、教長の和歌観を探るにおいても、具体的にその注釈内容を幾つかみる上で考察した。

その結果、従来いわれている教長の『古今和歌集註』とは違う顔もみえてきたといえようか。

キーワード：。教長『古今和歌集註』。顕昭『古今和歌集註』。藤原教長

はじめに

藤原教長の『古今和歌集註』は従来あまり顧みられることがなかった。しかし、注釈史上、『古今和歌集』において、一番古く、その根本にあたるともいえる。そこで具体的に教長の注釈内容を考察する中で、教長の注釈の意義を

探りたい。

まず教長の『古今和歌集註』の全貌を把握し、その上で教長の後、同じく『古今和歌集註』を著した顧昭の注釈との比較を通じ、両者の注釈の特徴を捉えることにより、教長に光をあてたい。そして最後に教長の『古今和歌集註』の言葉の内容を通じ、教長の和歌観を探ってみたい。

藤原教長の『古今和歌集註』について

京都大学文学部研究室所蔵の飛鳥井雅縁の『諸雜記』に、次のような記事がある。⁽¹⁾

治承元年八月十九日書寫了、此本花園左大臣仁有相傳秘藏、深納箱底、貫之妻手跡云々、貫之取捨之、歌傍有直付事等、是多貫之自筆也、讃岐院在位御時、借召之、觀蓮在俗、爲近臣申請、所書寫也、歌數相諧序詞、尤足爲證本而已、釋觀蓮、比較又了、同年九月十二日於禪定大王御前始讀申之、同廿四日終之、其間伴集歌一千九十五首、悉以所傳之說々、拂底聞食了、所謂讃岐院當帝之昔、法性寺入道以下、公卿侍臣男女之歌仙、各演其秘說、觀蓮一度無漏其座、兼又往年調俊賴其後、談宗延勝超、探和歌之旨趣、而其議敢不廢忘、今遇此道之中興、於大王御前寫斯如瓶水、悅哉、觀蓮空納胸中之蓄懷、已臨老後、悉散之、且述鬱憤且蕩堅執、豈非菩提之要路乎、幸甚々々……

これによると、花園左大臣源有仁の『古今集』は貫之の妻の筆で、貫之の書人がある。それを崇徳天皇は有仁から借りられたのを、教長が写し、その系統の本を更に治承元年八月に写して禪定大王に献上している。禪定大王とは喜

多院御室守覚法親王の事である。

その年の九月十二日、守覚法親王の前で『古今集』の講釈を始め、二十四日に終了。

崇徳天皇は御在位時、法性寺入道（藤原忠通）、公卿、男女の歌仙を集め、『古今集』の秘説を極められたが、教長もまた毎回、その会に参加した。また俊頼、基俊、宗延、勝超について和歌の研鑽を積んだ。そうして得た教長の古今集の秘説を、守覚法親王に授けた。

治承元年（一一七七）、教長、六十九歳の九月十二日から二十四日までのことである。

教長の『古今和歌集註』は、京都大学所蔵の孤本で、大部分は片仮名で記されている。

昭和二年、古典全集に覆刻。今、序の奥書を掲げると

本云
記伝

治承元年九月十二日謁教長入道親愛受訓説訖。

仁治二年卯月廿六日書写訖。

とある。卷三、卷六、卷十、卷十六にも、順を追って日付けが異なるが同様の奥書がある。

これによると、教長が治承元年に講義した聞書を、五十年以上後の仁治二年（一二四二）に書写した本を再び書写したものが現存本ということになる。教長は一千九十五首の和歌を講じた全講であるのに、『古今集註』は所々脱簡があり、岩橋小弥太氏²、赤瀬知子氏³の調査によると、二百二十首余の抄出注である。これは、教長の講義を受けた守覚法親王によるものか、それを筆記した人が選択したものか、後の転写の際の抄略か定かではない。あるいは教長自筆か。そこで、私なりに、古典全集本により、その抄出歌を提出すると、以下のようになった。

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
注の文中の内容によりそれと察しれるもの	「編者云」の内容の説明によりわかるもの	詞書・和歌も脱簡。注の内容によりそれとわかるもの	「詞云……云々」と、詞書の最初のみ。後は省略。和歌も省略。詞書の説明あり	「……云々」と、和歌の二句のみあげ後は省略。和歌の説明あり	詞書はあるが和歌は脱簡。詞書の説明あり	詞書・和歌ともあるもの
計	□	×	☆	▲	○	△
318	2	1	1	3	49	32
						234

教長の『古今和歌集註』にとられている歌番号。

（新編国歌大観番号による）

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八
春上	春下	夏	秋上	秋下	冬	賀	離別
3 6 9 15 17 20 27 30 33 37 42 44 45 47 55 58 62 63 68	69 77 80 82 83 94 97 98 100 101 109 113 115 121 123 125 126 132	137 147 150 152 165	177 190 204 225 226 228 236 238 246 247 248	258 262 275 279 282 283 285 299 302	318 324 338	345 346 348 349 350 355 361	367 368 370 375 376 377 379 382 385 388 392 394 395 396 397 402 404 405
19首	18首	5首	11首	9首	3首	7首	18首

	卷二十	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十一	卷十	卷九	
	御 大 歌 所	雑 鉢	雑 下	雑 上	哀 傷	恋 五	恋 四	恋 三	恋 二	恋 一	物 名	羈 旅	
	1070 [○] ・ 1072 [○] ・ 1076 [○] ・ 1080 [○] ・ 1083 [○] ・ 1087 [○] ・ 1088 [○] ・ 1091 [○] ・ 1092 [○] ・ 1094 [○] ・ 1097 [○] ・ 1098 [○] ・ 1099 [○] ・ 1100 [○] ・ 1104 [○] ・ 1105 [○]	1001 [○] ・ 1003 [○] ・ 1013 [○] ・ 1019 [○] ・ 1025 [○] ・ 1026 [○] ・ 1028 [○] ・ 1030 [○] ・ 1033 [○] ・ 1046 [○] ・ 1047 [○] ・ 1049 [○] ・ 1068 [○]	938 [▲] ・ 946 [○] ・ 947 [○] ・ 954 [○] ・ 957 [○] ・ 960 [○] ・ 981 [○] ・ 983 [○] ・ 985 [○] ・ 986 [○] ・ 988 [○] ・ 994 [○] ・ 995 [○] ・ 996 [○] ・ 1000 [○]	865 [・] 866 [・] 867 [・] 868 [・] 870 [・] 871 [・] 874 [・] 881 [・] 882 [・] 884 [・] 885 [・] 886 [・] 889 [・] 892 [・] 894 [・] 902 [○] 903 [○] 911 [・] 913 [○] 919 [▲] 927 [○] 930 [○]	833 [☆] ・ 835 [・] ・ 838 [・] ・ 839 [・] ・ 841 [・] ・ 846 [・] ・ 851 [・] ・ 855 [・] ・ 856 [・] ・ 857 [・] ・ 858 [・] ・ 862 [・]	796 [・] 747 [・] 801 [・] 748 [・] 802 [・] 753 [・] 808 [・] 754 [・] 811 [・] 755 [・] 812 [・] 756 [・] 817 [・] 759 [・] 818 [・] 760 [・] 819 [・] 762 [・] 821 [・] 765 [・] 822 [・] 766 [・] 827 [・] 773 [・] 780 [・] 781 [・] 783 [・] 785 [・] 786 [・] 787 [・] 789 [・] 790 [▲] 792 [・] 793 [・]	725 [・] 679 [・] 732 [・] 680 [・] 734 [・] 681 [・] 736 [・] 682 [・] 738 [・] 692 [・] 739 [・] 693 [・] 742 [・] 695 [・] 744 [・] 699 [・] 745 [・] 701 [・] 702 [・] 703 [・] 704 [・] 705 [▲] 706 [▲] 711 [・] 716 [・] 717 [・] 718 [・] 719 [・] 720 [・] 722 [・] 724 [・]	616 [・] 631 [・] 634 [・] 639 [○] 635 [・] 644 [□] 645 [□] 646 [○] 653 [・] 657 [・] 667 [・] 673 [・] 675 [・]	556 [△] ・ 558 [・] ・ 559 [・] ・ 565 [・] ・ 568 [・] ・ 569 [・] ・ 570 [・] ・ 572 [・] ・ 573 [・] ・ 585 [・] ・ 586 [・] ・ 588 [△] ・ 589 [△] ・ 598 [・] ・ 603 [・] ・ 610 [・] ・ 615 [・]	551 [・] 474 [・] 476 [△] ・ 478 [△] ・ 479 [△] ・ 485 [・] ・ 490 [・] ・ 493 [・] ・ 495 [・] ・ 497 [・] ・ 505 [・] ・ 509 [・] ・ 510 [・] ・ 518 [・] ・ 524 [・] ・ 526 [・] ・ 531 [・] ・ 541 [・] ・ 543 [・] ・ 546 [・] ・ 547 [・] ・ 549 [・] ・ 550 [・]	465 [△] 423 [・] 466 [△] 424 [・] 468 [△] 425 [・] 479 [・] 485 [・] 490 [△] 493 [△] 495 [△] 497 [△] 499 [△] 501 [△] 503 [△] 505 [△] 507 [△] 509 [△] 511 [△] 513 [△] 515 [△] 517 [△] 519 [△] 521 [△] 523 [△] 525 [△] 527 [△] 529 [△] 531 [△] 533 [△] 535 [△] 537 [△] 539 [△] 541 [△] 543 [△] 545 [△] 547 [△] 549 [△] 551 [△] 553 [△] 555 [△] 557 [△] 559 [△] 561 [△] 563 [△] 565 [△] 567 [△] 569 [△] 571 [△] 573 [△] 575 [△] 577 [△] 579 [△] 581 [△] 583 [△] 585 [△] 587 [△] 589 [△] 591 [△] 593 [△] 595 [△] 597 [△] 599 [△] 601 [△] 603 [△] 605 [△] 607 [△] 609 [△] 611 [△] 613 [△] 615 [△] 617 [△] 619 [△] 621 [△]	406 [・] 408 [・] 410 [・] 417 [△] 418 [・] 419 [・] 421 [・]	
計	318 首	17 首	13 首	15 首	22 首	12 首	34 首	31 首	14 首	17 首	24 首	25 首	7 首

右の表によると、巻一（春上）は全部無印つまり、詞書、和歌ともあり、それに注釈がほどこされている。巻二（春下）は三首を除いて、無印。巻三（夏）も詞書、和歌ともある。巻四（秋上）は二首を除いて無印。巻五（秋下）、

卷六（冬）、卷七（賀）は詞書、和歌ともある。卷八（離別）は六首を除いて無印。卷九（羈旅）は一首を除いて無印。卷十（物名）は十首を除いて無印。卷十一（恋一）は二首、卷十二（恋二）は二首、卷十三（恋三）は四首、卷十四（恋四）は三首、卷十五（恋五）は一首、卷十六（哀傷）は二首を除いて無印。ところが、卷十七（雑上）の後半から、卷十八（雑下）、卷十九（雑躰）、卷二十（大歌所御歌）の、そのほとんどが、③の○印の箇所で記したように、「……云々」と和歌の最初の二句のみ掲げ、後は省略し、それについて注釈をほどこしている。卷一（春上）がすべて、詞書、和歌とも掲げ、注をほどこしているのとは、対称的である。ただ、詞書、和歌のすべてを掲げなくても、順を追って『古今集』の講義をしてであろうから、その一部の言葉を持つてしても、その全貌は容易に察しがつき、新編国歌大観本の第何番の和歌であるということとは、今、私達が見ても推察に難くない。

以上、私が検索した結果、三一八首、抄出できたことになる。岩橋小弥太氏等の二百二十首の総数とは異なる結果であるのは、先の表における、①～⑦までの計り方で統計したからである。これまでの統計の仕方はおそらく①の詞書、和歌、注釈等の揃ったものであったと思える。しかし、②～⑦までも加えることによりその全貌をより正確に捉えられよう。

何故、現存本の教長の『古今集註』が、諸雑記によると、一千九十五首を講釈したのに三一八首しか記されていないのか。これは、今、他の写本が発見されていないために、その辺の事情を推察する資料がない。ただ考えられるのは、順番に『古今集』を講釈する際に、力を入れた和歌と、軽く流した和歌とがあつたのではないだろうか。九月十二日から九月二十四日までの十三日間に一千九十五首を講釈するには、一日平均、八十四首をこなさなければならぬ。そこには当然、教長自身、力の入れ具合の強弱があつたのではなからうか。現存本に記されている三一八首は、

その中でも特に教長が注意をうながし、念を入れた箇所とみてもいいのではないだろうかその観点に立つて以後の論述をすすめていきたい。

次に、その中での上位十人の歌人を掲げると次のようになる。

10	9		7	6	5	4	3	2	1
在原しげはる	小野小町	藤原敏行	伊勢	僧正遍昭	壬生忠岑	素性法師	業平	紀友則	紀貫之
4首	6首	7首	7首	8首	10首	11首	13首	14首	26首

上の表によると、一位は紀貫之で二十六首、群を抜いて多い。『古今集』に採られている貫之の和歌は全歌人の中でも一番多い。

六歌仙（業平・僧正遍昭・小野小町）が三人、十位内におり、その中でも、業平は特に十三首と、第三位に入っている。二位の紀友則、五位の壬生忠岑は共に選者である。『古今和歌集註』の現存本、全体をみてみると、他に一首ずつも含め、五十三名、読人不知は一二五首である。読人不知は一般に『万葉集』の詠風と『古今集』の詠風の間にあり、どちらかという『万葉集』の詠風に近い。教長が三一八首の内、約四十パーセントにあたる一二五首も取り上げていることは、『古今集』全体の読人不知歌の割合と呼応するにしても、注目される。

顕昭の『古今和歌集註』との関係

教長の後、同じく守覚法親王に『古今集』を講義したのは顕昭（一一三〇年頃～一二〇九年頃）である。顕昭は六

	卷二十	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十一	卷十	卷九	卷八	
	御大歌所	雑体	雑下	雑上	哀傷	恋五	恋四	恋三	恋二	恋一	物名	羈旅	離別	
計	1069 ・ 1070 ・ 1071 ・ 1072 ・ 1073 ・ 1074 ・ 1076 ・ 1079 ・ 1080 ・ 1082 ・ 1083 ・ 1087 ・ 1089 ・ 1091 ・ 1092 ・ 1094 ・ 1095 ・ 1096 ・ 1097 ・ 1098	1001 ・ 1002 ・ 1003 ・ 1007 ・ 1008 ・ 1013 ・ 1019 ・ 1020 ・ 1025 ・ 1026 ・ 1030 ・ 1033 ・ 1034 ・ 1037 ・ 1047 ・ 1049 ・ 1054 ・ 1068 ・ 995 ・ 997	933 ・ 934 ・ 935 ・ 946 ・ 947 ・ 950 ・ 954 ・ 959 ・ 966 ・ 968 ・ 981 ・ 983 ・ 985 ・ 986 ・ 988 ・ 990 ・ 993 ・ 994 ・ 995 ・ 997	907 863 ・ 911 864 ・ 912 865 ・ 914 867 ・ 915 868 ・ 918 870 ・ 925 871 ・ 927 872 ・ 930 874 ・ 878 ・ 880 ・ 882 ・ 885 ・ 886 ・ 890 ・ 892 ・ 894 ・ 902 ・ 903 ・ 905	830 ・ 833 ・ 841 ・ 845 ・ 846 ・ 852 ・ 855 ・ 857 ・ 858 ・ 862 ・ 880 ・ 882 ・ 885 ・ 886 ・ 890 ・ 892 ・ 894 ・ 902 ・ 903 ・ 905	819 747 ・ 821 753 ・ 822 754 ・ 823 758 ・ 827 759 ・ 762 ・ 764 ・ 765 ・ 775 ・ 780 ・ 784 ・ 786 ・ 787 ・ 789 ・ 803 ・ 808 ・ 812 ・ 816 ・ 817 ・ 818	677 ・ 691 ・ 694 ・ 699 ・ 701 ・ 702 ・ 703 ・ 704 ・ 708 ・ 711 ・ 717 ・ 723 ・ 724 ・ 725 ・ 736 ・ 738 ・ 739 ・ 746	616 ・ 620 ・ 623 ・ 628 ・ 631 ・ 632 ・ 634 ・ 635 ・ 638 ・ 639 ・ 645 ・ 646 ・ 650 ・ 653 ・ 657 ・ 663 ・ 670 ・ 675	554 ・ 558 ・ 562 ・ 564 ・ 565 ・ 567 ・ 568 ・ 572 ・ 573 ・ 585 ・ 586 ・ 594 ・ 598 ・ 603 ・ 614	537 473 ・ 540 474 ・ 541 476 ・ 546 477 ・ 549 478 ・ 550 479 ・ 551 485 ・ 489 ・ 490 ・ 493 ・ 496 ・ 497 ・ 498 ・ 501 ・ 502 ・ 505 ・ 509 ・ 510 ・ 526 ・ 533	465 422 ・ 466 424 ・ 425 ・ 427 ・ 431 ・ 435 ・ 441 ・ 442 ・ 444 ・ 445 ・ 447 ・ 448 ・ 449 ・ 450 ・ 451 ・ 457 ・ 458 ・ 460 ・ 462 ・ 463	406 ・ 407 ・ 408 ・ 410 ・ 418 ・ 419 ・ 420 ・ 442 ・ 444 ・ 445 ・ 447 ・ 448 ・ 449 ・ 450 ・ 451 ・ 457 ・ 458 ・ 460 ・ 462 ・ 463	365 ・ 376 ・ 388 ・ 392 ・ 394 ・ 402	
	322	20	18	20	29	10	25	18	18	15	27	23	7	6
	185	10	11	10	16	7	18	12	9	8	18	18	5	5

次に、教長と顕昭との『古今和歌集註』における比較を表に記してみる。

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻数
物名	羈旅	離別	賀	冬	秋下	秋上	夏	春下	春上	部立
25	7	18	7	3	9	11	5	18	19	教長
23	7	6	6	7	15	15	8	15	20	顕昭
18	5	5	4	1	5	3	3	11	12	共通
78	71	83	66	14	33	20	37	73	60	%

	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
計	大歌所御歌	雑体	雑下	雑上	哀傷	恋五	恋四	恋三	恋二	恋一
318首	17	13	15	22	12	34	31	14	17	24
322首	20	18	20	29	10	25	18	18	15	27
185首	10	11	10	16	7	18	12	9	8	18
57%	50	61	50	55	70	72	66	50	53	66

右の表によると、顕昭は三百二十二首を注釈し、教長との共通和歌は五十七パーセントである。

教長と顕昭との共通歌の比較

顕昭の『古今和歌集註』における、教長の註との関係において、だいたい次の四つの①から④までに分類できる。

①群……教長の注をそのまま引用

⑤群……教長の注を肯定、発展

⑥群……教長の注を否定

⑦群……教長の注の方がいいと思われるもの

* 歌番号は新編国大観番号

顕昭の『古今集註』は『続々群書類従本』による

教 長 註		顕 昭 註		歌番号
①	イカバサキコレハミヅウミニハベルサキナリ。 「サ、ノハノサヤグハ、サラ／＼トナルト、教長卿ハ注セリ。」	教長卿云ミヅウミニアルサキナリ サ、ノハノサヤグハサラ／＼トナルト教長卿ハ注セリ ソヨグトイフ詞トゾオボユル		457
②	正月ノ卯日ハ、杖ヲタテマツルコレヲシモトイフコレヲ結カツラトヨセテ、ヤガテ山ノ名ヲヨミテ、マナフトキナク、タノシ、トヨムナリ。詞ニヤマト舞トイエルハ、諸社祭ナドニハ求子、駿河舞ヲモトニシテ、倭舞ト云事アリ。求子、スルガマヒナドハテ、和琴、笛、篳篥ナドハ、マタヤマズシテ、人ヲハジメトシテ、次第ニカナヅルナリ。神事ニハ、カクマヒタノシブヲ、ヨキコト、スルナリ。	教長卿云正月ノ卯日ハ杖ヲタテマツルコレヲシモト、イフコレヲ結カツラトヨセテヤガテ山ノ名ヲヨミテマナクトキフタノシトヨムナリ詞ニヤマト舞トイエルハ諸社祭ナドニハ求子駿河舞ヲモトニシテ倭舞ト云事アリ、求子スルガマヒナドハテ和琴笛篳篥ナドハマタヤマズシテ人ヲハジメトシテ次第ニカナヅルナリ神事ニハカクマヒタノシブヲヨキコト、スルナリ		1047
③	ノボレバクダル事ツ子ノゴトシ。此河、コノゴロハ、キテカハトゾ彼國人ハマウス。イニシヘノ名ニハカリテミナイヘリ。スミダガハバ、スダトイヒ、アフクマガハバ、アブクマトテ、オホワタリトゾ申ヌル。ヨロヅノトコロノナヲ、カタコトノヤウニイヘリ。コレラハ京ノ人ミタルハスキナシ。イハムヤ、ミカドハシロシメサヌヲ、カツハスキシメサムタメニ、カクヤアヅマウタニアラハセリ。	教長卿云ノボレバクダル事ツ子ノゴトシ此河コノコロハキクカハトゾ彼國人ハマウスイニシヘノ名ニハカリテミナイヘリスミダガハババスダトイヒアフクマガハバアブクマトテオホワタリトゾ申ヌルヨロヅノトコロノナヲカタコトノヤウニイヘリコレラハ京ノ人ミタルハスキナシイハムヤミドハシロシメサヌヲカツハキコシメサムタメニカクヤマヅマウタニアラハセリ		1092
④				

以上、④の①から④までの両者の注を見ると、顕昭が教長の注をそのまま引用していることは明白である。

③の「ヤマト舞」の注が詳しいのは、教長が実際に十九歳から三十九歳の間に数度舞人選ばれているからである。『後撰和歌集校本と研究』研究編の「藤原教長年譜」小松茂美編（昭和三十六年刊）によると以下の記事がみえる。

西紀	年 月 日	年 齢	記 事
1127	大治2・11・18 11・23	19	五節に一舞の舞人にえらばれる（長秋記） 賀茂臨時祭に一舞の舞人をつとめる（中右記）
1130	大治5・3・16	22	石清水臨時祭に舞人となる（中右記）
1134	長承3・4・21	26	この年、内裏における舞御覧に伯光貞の弟子として抜頭の曲を舞う（教訓抄）
1136	保延2・3・8	28	内裏の舞楽に抜頭を舞う（春日神社古記録體源鈔）
1143	康治2・11・13	35	五節参内、舞姫を献ず（本朝世紀）
1147	久安・3・2・23	39	片舞にあたり、舞人六人のうちにえらばれる（本朝世紀）
1154	久寿元・11・17	46	五節御前議にあたり舞姫装束を送る（台記）

崇徳院の近臣として、教長は宮中行事において、その中心的役割を占めていたが、舞いもそのひとつであり、注にその経験が生かされている。

④で「スミダガハ」等、川に関する注がみえている。「コレハハ京ノ人ミタルハスクナシ。」と言っているが、教長は保元の乱で捕らえられ、常陸国に流される。保元元年、八月三日、時に教長四十八歳の時である。その道中に、隅

田川のほとりで次のような歌を詠んでいる。

ことにあたりてあづまのかたにまかりけるに、おほいなるかはのほとりにゆきてひもくれがたに、わたしも
りはやわたらなむといそがせば、いとものがなくてふねにのらんとするに、このかはをばなにとかなづく
るととふに、これなむすみだがはといふは、むかし在中将のいざこととはむやみやこどりとよみけむを思ひ
いでられて、きしかたゆくすゑものあはれることかぎりなくてよめる

すみだがはいまもながれはありながらまたみやこどりあとだにもなし

(貧道集・雑歌・825)

「スミダガハラバ、スダトイヒ、アブクマ、ガハラバアブクマテ……ヨロヅノトコロノナヲ、カタコトノヤウニ
イヘリ。」と言っているのは、実際に教長がその地に行つた昔の経験から述べている事で、単なる机上の知識を述べ
ていないことが、このようなところからも伺える。

㊦

⑤	教 長 註	顯 昭 註	歌番号
	ニゴリニシマヌ心ハ、カノハチスノゴトク、キ ヨキニ、カリノツユラタマトミルヲ、アザムク ハマコトニアラヌヲ、マコト、ミ、思フナリ。	……カノハチスノゴトキヨキコ、ロニテアタナルツユラタマ トミルハマコトニナラヌコトナレバアザムクニテアル世ト教 長卿ハ釈セリ 或人ノマウシハベリシハハチスハ濁リニシマヌモノニテ又モ ノニテアルニイカニヲケルツユラバ人ニハタマトミセアザム クゾトヨメルニモヤアラント云云両義ヨク／＼コ、ロエアハ スベシ……	165

⑥	コレハ、ホト、ギスノナクヤウニ、モノヲモフトキハ、ネヲナクト読メリ。ヨリハエテハ、ウチマカセテ、ハッカルトコロモナシト、セチナル心ナリ。	スベシ…… 教長卿云ヨリハヘテトハウチマカセテハッカルトコロモナシトセチナルコ、ロナリ或人ハウチハヘテヲモウチマカセテトモイヘリ清輔朝臣ハヨリハヘテトハ或物ニハウチハヘテトイフ事也	150
⑦	タビユクニハ、ヌサヲモテ、ミチノホトリノカミニ、タテマツルヲ、タムケトイフナリ。ヌサトイフハ、五色ノキヌノキレナリ。ミカドハ、キヌヲ一疋ヅ、ソメテ大神宮以下ノ神タチニ、マツリノトキニタテマツラセタマヘリ。コレヲバニギテトモイフナルベシ。サレバ、モミヂノイロノナルハ、コノ又サニ、タルヲ、チルトキハ、タムクルヤウニヲホユレバ、タビノコ、チナン爪、トヨメリ。	……教長卿云ヌサトイフハ五色ノキヌノキレナリミカドハ絹ヲ一疋ヅ、染テ大神宮以下ノ神達ニ祭ノ時ハタテマツラセタマヘリコレヲバニギテトモイフセタマヘリコレヲバニギテトモイフナルベシサレバ紅葉ノイロノナルハコノヌサニ似タルヲチルトキハタムクル様ニヲボユレバ旅コ、チストよめる也或人云タムクトハ掌ヲ合テ神ニ物ヲ献也或説ニハ供ト云文字ヲタムクト讀云々又清輔朝臣云佛神ニ物タテマツルヲタムクト云手向ト云心也……清輔が佛神ニ物タテマツルヲタムクト云ルハ僻事也タムクトハ神ニカギルナリ	299
⑧	田邑ハ、文徳天皇ナリ。齋院明子内親王ヲ、ハ、天アリナドイヒテ、改ムトシケルナリ。ソ乃コト僻事ニテトイフナリ (歌) ツ、ノクマナキヤウニ、キヨキラヒトノソラゴトライヒテ、クモノツ、ヲカク爪ヤウニ、ウシナハムト爪レドモ、アヤマリナケレバ、ツキニキエ爪トヨメリ。	教長卿云田邑ハ文徳天皇ナリ齋院明子内親王ヲ母天アリナドイヒテ改メムトシケルナリ其事ヒガゴトニテトイフナリ私云田邑山陵也明子内親王ハ淳和皇女也母清原春子右大臣夏野女也……歌ノコ、ロハ教長卿云月ノクマナキヤウニキヨキラノソラゴトライヒテクモノヲカクスヤウニウシナハムトスレドモアヤマリマケレバカリツヒニキエズトヨメリケナクニハエナクニト云也	885
⑨	トシライタルランナノウタナリ。イマハカクオイニタレドモ、ワカカリシムカシハ、オトコニアヒテ、サカリヲホカリキトナリ。	教長卿云トシライタル女ノ歌ナリイマハカクオイニタレドモワカ、リシムカシハオトコニアヒテサカリヲホカリキトナリ顯昭云サカユクトハサカユトイフ調ナリマタ此歌男女ノ詠サダメガタシオトコノ歌ニテモイヘライデタラムモノ、我モムカシハオトコニテサカヘテコンアリミカトヨメラムモタガハジ……サレド女ノ歌トイヒテハイマスコシコト、キコユ	889

①①	①⑩
<p>イロノカハリユクハ、ウツロハント爪ルカトヨメリ。ウツロフハ、チリナントテ爪ヨメルナリ。</p>	<p>クレナキハ、イロノコキラバ、フリデトイヘリ。コレニツキテ、クレナキノフリデツ、ナク、トヨミテ、コレニタモトノイロササルトヨメリ。イタクナケバ、ナミダクレナキニナルトイフコトノハベルユヘナリ。シカレバ宝篋經ニモ、佛衆生ヲ、アナガチニアハレビテ、涕血ヲナガ爪ト、ケリ。切ナルコトニハ、ホトケモカクナシハシマシケル。</p>
<p>教長卿云イロノカハリユクハウツロハムトスルカトヨメリ私云ウツロフトイフ詞サマトナリ萬葉歌云「ムメカエニナキテウツロフウクヒスノハ子シロタヘニアハユキソフル」是ハ枝ニウツルヲウツロフトヨメリ又云「コノマヨリウツロフツキノカケヲ、シミタチヤスラフニサヨフケニケリ」又コノハウツロウトヨムハイロノツク心ナリ菊ニウツロフトヨムハイロノカハルナリ然者コノサクラノウツロフモ同心ナルベキニ「ウツロハムトヤイロカハリユク」トオナジコトヲカサ子テイヘルモアヤシトテ此歌ノコ、ロハチルヲウツロフトヨメル歟イロノカハルハチラムトスルカトヨメルナリ下歌云「ハルカセハハナノアタリヲヨキテフケコ、ロツカラヤウツロフトミム」此歌モ風ニカケテヨメリチルヲウツロフトヨメルカトモコ、ロヘツベシ又「ヨシノカハキシノヤマフキフクカセニソコノカケサハウツロニヒケリ」是モチリヌルヲウツロフトイヒツベシ山吹ナドハイロカハルナドイフベクモナシ但オホクイロカハルヲヨメルトゾオボユル詞ニモソノコ、ロアリ……</p>	<p>……教長卿云イタクナケバナミダクレナキニナルトイフコトノハベル故也然者宝篋經ニモ佛象生ヲ強ニアハレビテ涕血ヲナガスト説ケリ切ナル事ニハ佛モカクナムオハシマシケル私云次下同人歌ニモシラタマトミエシ涙ノ紅ニウツロフトコトヨメリ又哀傷部ニモ「チノナミタヲチテソタキツ」トヨメリ戀ニモ悲ニモ紅涙ヲナガス常事也……又考宝篋印陀羅尼經云「豐財園中有古朽塔」、放光明、出聲讚言、善境界、于時世尊禮彼朽塔、右邊三匝、脫身上衣、用覆其上、玄然垂淚涕血交流、十方諸佛皆同觀視悉皆流淚云々</p>
69	598

⑤は教長と清輔の注を「両儀ヨク／＼コ、ロエアハスベシ」と二人を参照している。

⑥も教長と或人と清輔の注を参照。

⑦は教長の注を引用し、参考にして肯定しているが、清輔の言い分には「如何」と否定。

⑧は教長の詞書の注に対して、顯昭は異説を唱えているが、和歌の解釈に対しては教長の注をそのまま引用し、顯昭自身の注はない。

⑨は教長の注を否定しないが、「男」の歌とも「女」の歌ともとれることを述べ、どちらかというところ、教長のいう「女」ではなく「男」の方がいいのではと取っている。従来、この889番の歌は三説に分かれている。但し、「男山」を詠んだのが年をとった女とするものは教長のみである。衰老の男とするものが、一応教長の説を受け止めつつも顯昭、榮雅、正義、金子評釈、窪田評釈、岩波文庫等。また世をそむき遁世した出家とするものが、余材抄にある。私自身は、直観的に、まずこの歌を詠んだ時、男が詠んだものと感じられた。教長がどうして、女の歌と解したのか関心の持たれる所である。

⑩教長の注を引用し、さらに教長が述べた宝篋經のさす具体的に相応する箇所を顯昭は經典よりひいてきている。故に補注のような形になっている。

⑪は教長の注を引用し、その後「ウツロフ」の様々な場合を説明するために、具体的に何首かの歌を出して、それを説明している。そして結局、教長の注したように、この歌の場合は「チルヲウツロフトヨメルカ」と言っている。教長が端的に言っているのに対し、顯昭はそれに至る課程を、詳しく言及している。

教 長 註	顯 昭 註	歌 番 号
<p>⑫</p> <p>彼本ニハ、ヤマザクラトアリ。コレコソイエツトニセンモ、イマ爪コシハカケアヒテキコユレ。ツト、イフハ、ワガトセントナリ。先起トカキテハ、ツトニラクト九條右蒸相乃日中行事ニモヨメリ。シカレバ、コノハナヲ、リモチテユキテ、マヅイエノモノトシテ、人ニモミセントナルベシ。</p>	<p>教長卿云新院御本ニハ山櫻トアリコレコソイエツトニセムモイマスコシハカケアヒテキコユレツトイフハワガトセムトナリ先起トカキテハツトニラクト九條右蒸相ノ日中行事ニモヨメリシカレバコノ花ヲヨリモチユキテマヅ家ノ物トモシテ人ニモミセントナルベシ顯昭云此歌彼御本ニモサクラバナトアリ風諸本ニ山サクラトアルコトナシ詞ニ山ノサクラヲミミトアレバ同事ナリ又ツト、ハ土産ト云事也萬葉ニハツトトモカケリ田舎ツトナドイフハキナカノモノヲツ、ミモチニヤコノ人ニチラセムト云也……</p> <p>先起ヲツトニラクトイヘバマヅ家ノ物トセムト釋シヨラル、オモヒガケヌ事也……</p>	<p>55</p>
<p>⑬</p> <p>ヤヨヤハ、ハ夜ナリ。フルクハ、ヒサシキコトニ、七日、七夜トイフヲ、セメテヨノ中ニ爪ミワビ又、コレニモ爪ギテ、ヤヨヤトヨメリ。ホト、ギ爪ハシデノヤマノトリトイヘバ、カシコニアラン、テ、ハ、ナドニカクイヘ、トヨメルナルベシ。</p> <p>イトゞ心ボソク、アハレナルウタナリ</p>	<p>教長卿云ヤヨヤハ八夜ナリフルクハヒサシキコトニ七日七夜トイフヲセメテヨノナカニスミワビヌコレニモスギテヤヨヤトヨメリコトヅテムハコトヅケムト也郭公ハシデノ山ノトリトイヘバカシコニアラムテ、ハ、ナドニカクイヘトヨメルナルベシイトゞコ、ロボソクアハレナルウタナリ清輔朝臣云ヤヨヤマテトハヤシバシマテナト云心也ヤマヨリクルトリナレバウキヨノナカニスミツビヌ山ヘイリナムコトヅテムトイフコ、ロニコツ今案云後義勝數人ヲヨブトイフ詞ヲバヤヨトヨメリ八夜マテコトヅテムト云コトハゲニトモキコエズ又八夜ヲバヤヨトコソイハメヤヨマデニトハイハズシテヤヨヤトイヘル後ノヤ文字コ、ロエラレズハベリヌ此歌在「猿丸集」其詞云アタナリケル女ニモノライヒツメテタノモシゲナキコトライフホドニホト、ギスノナキケレバトアリ此詞ニツケテ</p>	<p>152</p>

<p>⑬</p> <p>コトバニ、メノヲトウトヲモテ、トカケルハ、ナリヒラガメノヲトウトヲ、メニシタリケルヒトノモトヘ、ウエノキヌカハシケルナリ。ウタニ、ムラサキノ、イロコキトキハ、トヨメルハ、四位ノウヘノキヌハ、ムカシ、ムラサキノソメケリ。メモハルニト、トイヘルハ、クサキノメ</p>	<p>⑭</p> <p>カギリナキハ、メデタキトイフ。カ、ルキミガタメニ、ヲルハナハ、イツトモワカ爪、トキハカキハナリトイフナリ。</p>	<p>⑮</p> <p>ミカノハラ、イヅミ河ハ、ヤマトノクニ、ハベリ。ソノ河ノホトリニ、カセ山ハ、ベルヲ、ヤガテカ、ルトコロノ名ドモ、コトバニツヅケナセリ。フルキ哥ノフルマヒナルベシ。</p>	<p>⑯</p> <p>ウケクハ、ウキニトイヘルナリ、サムケクナド、イヘルガゴトシ。フルクハ、カ、ルコトバヅカヒモハベルナリ。コノハニフレルユキハ、トクキユルヤウニ、ユキウセナムトナリ。</p>	<p>⑰</p> <p>野ニモ山ニモ、マドフコ、ロナレバ、イヅコライヅクトカ、ヨラバイトハム、トヨメルナリ。</p>
<p>教長卿云野ニモ山ニモマドフコ、ロナレバイヅコライヅクトカヨラバイトハムトヨメルナリ 清輔云イヅクニカクウキヨラノガレテモスムベキ野山ニテモワカコ、ロハマドハルトヨメリ 顯昭云教長卿ノ義ノコ、ロニテハイヅクニカトイフコトバカナハズ又兩義トモニ末句ノコ、ロイカバトキコユ、タゞヨラバイトハデ山野ニ心ヲマドハシテコソアラメトモヨメルベシ、ペラナレトイフハナドフベシト云也</p>	<p>教長卿云野ニモ山ニモマドフコ、ロナレバイヅコライヅクトカヨラバイトハムトヨメルナリ 清輔云イヅクニカクウキヨラノガレテモスムベキ野山ニテモワカコ、ロハマドハルトヨメリ 顯昭云教長卿ノ義ノコ、ロニテハイヅクニカトイフコトバカナハズ又兩義トモニ末句ノコ、ロイカバトキコユ、タゞヨラバイトハデ山野ニ心ヲマドハシテコソアラメトモヨメルベシ、ペラナレトイフハナドフベシト云也</p>	<p>教長卿云ミカノハラ、イヅミカハ、カセヤマハ大和國ニアリ云々私云此三ヶ處ハ皆山城國也麩原、桃河、鹿背山トカケリ萬葉ニハ「泉川江キセノ水ノタエハコソオホミヤトコロウツモリモユカメ」三原フタイノ野ヘラキヨミコソオホミヤトコロサタメケラシモ「ヲトメラカウミヲカクトイフ鹿背山トキノユケレハミヤコトマリヌ」讀久遠京一歌也田部福丸集二出云ク</p>	<p>教長卿云ウケクハウキニトイヘルナリサムケクナドイヘルガゴトシ、フルクハカ、ルコトバヅカヒモハベルナリ、コノハニフレルユキハトクキユルヤウニユキウセナムトナリ 私云コノハニフレルユキ、トクキユトイハムコトイカゞサラバコズエニフレルユキトゾイフベキ……</p>	<p>教長卿云野ニモ山ニモマドフコ、ロナレバイヅコライヅクトカヨラバイトハムトヨメルナリ 清輔云イヅクニカクウキヨラノガレテモスムベキ野山ニテモワカコ、ロハマドハルトヨメリ 顯昭云教長卿ノ義ノコ、ロニテハイヅクニカトイフコトバカナハズ又兩義トモニ末句ノコ、ロイカバトキコユ、タゞヨラバイトハデ山野ニ心ヲマドハシテコソアラメトモヨメルベシ、ペラナレトイフハナドフベシト云也</p>

グムヨウイフ。クサキノメグミイツルハ、ヨロコ
ビニヨセタリ。四位ナドシタリケルラ、カクヨメ
ルナルベシ。

清輔朝臣云コレハメノハラナル女ノ許ヘウヘノキヌヤルトテヨメ
ル歌也メモハルトハ目モ遙ニトイヘルナリ女ヲ紫ニヨソヘテムラ
サキノヒトモトユヘニメモハルカニ野ニミユルクサキノイヅレト
モナクムツマシキヤウニコノ人ヲ思コ、ロフカキユヘニハルノヤ
カラマデ思ナムステラレ又トヨメル也

伊勢物語云ムカシヲムナハラカラフタリアリケリヒトリハアテナ
ルオトコヒトリハイヤシキオトコノマツシキシタリイヤシキオト
コモタルガシハスノツゴモリニウヘノキヌヲアラヒテツカラハ
リケリコ、ロザシハイダシケレドマダサヤウノワザモナラハザリ
ケレバキヌノカタヲハリヤリテケリセムカタナクテタバナキニナ
ケケリコレヲカノアテナルオトコキ、テイトコ、ログルシカリケ
レバイトキヨゲナルロウサウノウヘノキヌタ、カタトキニミイデ
テヤルトテ「ムラサキノイロコキトキハ云々」ムサシノ、コ、ロ
ナルベシ伊勢物語

顯昭云清輔朝臣ガ義ニツクベシ伊勢物語ノ詞ニカナヘリ奥ニモム
サシノ、コ、ロナルベシ伊勢物語トイヘル是ハカミニハベルムラサキ
ノヒトモトユヘニトイフ歌ノコ、ロヲカケルナリロウサウノウヘ
ノキヌヲヤルトアレバ六位ノ袍ナリ四位ノウヘノキヌナレバムラ
サキトヨメルトイヘルオホキニ物語ノ詞ニタガヘリ

⑫は「山桜」と「サクラバナ」について、教長の注がおかしいと述べている。また「諸本ニ山サクラトアルコトナシ」と言っているが、元永本、筋切本には「山桜」とあるので顯昭の断定は正しくない。

しかし、「ツト」の語釈において教長が「ワガセムトナリ。先起トカキテハツトニオク」とあるのを顯昭が「ツト、ハ土産ト云事也」と指摘しているのは正しい。

⑬は「ヤヨヤ」を教長が「八夜ナリ」と解したのに対し、顯昭は清輔の「ヤヨヤマテトハヤシバシマテト云心也」とひき合いに出し、その説を肯定し、教長の注を否定。そのために猿丸集の歌もひき、説明。榮雅も寂恵も教長の注

に同じ。ここは教長の間違いとみてよいだろう。しかし最後に教長が「イトド心ホソクアハレナル歌ナリ」と述べているのは、この歌の詩情をしみじみ深く捉えていることがわかり、この教長の言葉に興味が持たれる。

⑭は「教長卿ノ義ノココロニテハイゾクニカトイフコトバカナハズ」と否定し、更に清輔の注も含めて「両義トモニ未句ノコ、ロイカバトキコユ」と重ねて否定している。他の注釈をみると、いずれも微妙に違うが、栄雅が教長のニュアンスに近い。

⑮は顕昭が「コノハニフレルユキ、トクキユトイハムコトイカバサラバコズエニフレルユキトゾイフベキ」と述べている。顕註密勘、寂恵、両度聞書等、いずれも「木のはにふれる雪」と解し、教長の注と同じ立場をとっている。ここは顕昭の独断といえようか。

⑯は地名の所在場所が教長と顕昭とは異なる。「ミカノハラ、イツミ河、ヤマトノクニニハベリ」と教長が注しているのに対して「山城國也」と異説を唱えている。同時に万葉集の歌も提出し、その信憑性を打ち出そうとしている。

⑰は「カギリナキ」の解釈を、教長が「メデタキ」と注しているのに対し顕昭は「キハマリナキ、無窮也」と異説を述べている。思うに顕昭の解し方がわかりやすいが、教長はそれをふまえて、だから「メデタキ」とその奥の意味する心を注している。

⑱は教長の注をひいた後、清輔の非常に詳しい注をひき、清輔が義ニツクベシ、伊勢物語ノ詞ニカナヘリ」と述べている。さらに教長が「四位ノウヘキノキヌ」といつているところに対し、「ロウサウノウヘノキヌヤルトアレバ六位ノ袍ナリ四位ノウヘノキヌナレバムラサキトヨメルトイヘルオホキニ物語ノ詞ニタガヘリ」と、実証的に教長の

注を否定している。

①	教 長 註	顯 昭 註	歌番号
⑬	<p>ライノコンシミチニ、サクラチリカヒマガエト、 ライフセグ心ナリ。ミチマドフガニハ、マド ウバカリトイフナリ。コトバヲ瓜テタラヌニク ハエラク、サダマレルナラヒナリ。</p>	<p>教長卿云老コムミチニサクラチリカヒマガヘト云ミチマドウガ ニトハマドフバカリト云也詞ヲステタラヌニクハエラクサダマ レルナラヒナリ 私云チリカフハチルト云事也ユキカフトイフガゴトシガ ニトハガトイフコトバニニラグシタルナリ……</p>	349
⑭	<p>コノハノ、フユハチルヤウニ、フミノコトノハ モ、トノ子ニカヘシテム、ワガミフリテハ、 ヲキドコロナシ、トナリ</p>	<p>教長卿云コノハノフユハチルヤウニフミノコトノハモ、トノ子 ニカヘシテムワガミフリテハオキドコロナシトナリ 今案ニコノハノ子ニカヘルコ、ロニアラズトモタダフミヲヌシ ニカサムトヨムコ、ロニテモアリヌベシヤ</p>	736
⑮	<p>コヒヲシテ、ワビキタレド、サリトテハトテ、ウ チフ瓜ナリ。ナカトイヘルハ、ウチナリ。ソレニ ミユルユメニ、コヒシキヒトニ、アフトミツルヲ、 ウツ、ニナレカシ、トヨメルナリ。ユキカヨフ、 ユメノタヅヂハ、カヨフトイヒヲキツレバ、シモ ニ、タヅヂトイヘリ。フルキウタ、カクノミコト バラツラ子、ツタハリユク、コレガヨキヤウナル ベシ。</p>	<p>教長卿云ウチヌルナカトハ夢ノウチナリ 私云ナカニユキカヨフトイフハユメニコヒシキ人ノモトヘユクト ミルヲ二人ガナカト云歟ユメノタヅヂトハ萬葉ニハ直道トカケリ ウツ、ニハユキガタキニユメニハヤスクニユキヤスキミチト云也</p>	558

⑬は老いらくの道に桜の花が舞い散り、吹雪のように道をかき消している幻想的な歌である。その解釈としては教長の方が顯昭の注よりも、一首全体の雰囲気をも端的に把握している。

⑭は教長の注の方が、この歌の解釈に際し、顯昭の注に比して、一種の余情が感じられる。

②は、顯昭のこれまでの例になく、教長の注全体を引用せず、その一部を記すにとどめ、顯昭なりの注をほどこしている。両者の説にそう異同はないが、解釈の仕方の流れに、教長の方が詩情がある。

以上教長と顯昭の注釈の比較を④から⑩まで行つた結果、次のことがいえる。

④でみたように顯昭は教長の注をそのまま引用し、自身の新たな注をほどこしていない、つまり教長に教えられているという場合がある。地名、物の名、舞いなどの宮中行事は教長の体験によるところもあり、得意な分野であつたと伺える。また

⑤でみたように教長の説を肯定し、その上で、さらにそれを深め広げるために顯昭は新たに自身の考え、あるいは補注を加えていく。つまり、教長の注をベースにさらに発展させている。また、同じ六条家歌人である義兄の清輔の説に対して、否定する時も度々あり、（教長の注の肯定の後に清輔の注を否定する）その注釈的態度は客観的であつたことが察しられる。そして、次の

⑥でみたところが、従来の解説には一番強調して、教長との関係が説かれている、顯昭が異説を唱えている箇所である。教長が端的に注釈している所を、万葉集等、他の歌をひいたり、伊勢物語の内容に詳しく言及したり、語釈においてもていねいな考察をし、実証的に、教長の説を翻えしている。決して顯昭は「徹底的に批難したり」^⑤「檜玉にあげる」^⑥という感情的態度ではなく、先に述べたごとく冷静に考察し、教長の注に誤謬がある場合は訂正している。しかしまた

⑦におけるように、両者の注の内容に大きな違いはないものの、教長の注の方が端的でありつつも和歌の解釈に対して詩情がみられ、むしろ、教長の方が優れていると感じられる場合がある。これは、教長はダイレクトに歌の一首

を捉えようとする姿勢に対し、歌学者である顕昭は緻密に探ろうとする。その態度の違いによるものであろう。細部に注視するの余り、全体に詩情がたちのぼらないこともある。

両者の比較を試みた結果言えることは顕昭の注釈的態度の一番大きな特徴は、まず注の巻頭に、教長の注のほぼ全文を引用している。そして、その後に、もし清輔の注があればそれも引用し、その上で、顕昭は、自身の解釈をほどこしている。④から⑩までの肯定・否定等、その内容に違いはあれ、顕昭にとつて『古今和歌集』の注釈をするということは、とりもなおさず眼前に藤原教長という絶対に無視し得ることのできない存在があったという事実である。これは両者の注釈の共通歌（185首）全般についても同じことがいえる。

定家は顕昭の注を大いに参考にして、『顕注密勘』なる注釈書を著したと言われている。定家は顕昭の注説に対しかなり肯定的で、顕昭の注説を取り込んでいる箇所もある。その源流をたどってみると、顕昭の前に教長がいる。そういう意味においても、この顕昭の教長に対する態度の重味は見直されるべきである。

『古今和歌集註』における教長の和歌観

『古今和歌集註』の注釈の言葉により、教長の和歌観の一端が伺えるものを以下探ってみたい。先の章の表記のよ

* 歌番号は新編国歌大観番号

	教 長 註	歌番号
①	カ爪ミタチコノメモハルノユキフレバハナ、キサトモハナゾチリケル（紀貫之） ハルヲハ、キノメハルコトナルヲ、キノメトモハルノト、リテユキノフルヲ、ハナトミテ、ハナ、キサトナレド、ハナノチルトヨメル、ハジメラワリ、カケアヘリ。ウタノ本トイフベシ。ヲホカタ、ツラユキノウタノアリサマニテ、カク、ハ、キサトニトイヒヲキテ、ハナチルトヨメル、タシカニヨメリ。…… 人ハイサ心モシラ爪フル里ハ花ゾ昔ノカニ、ホヒケル（貫之）	9
②	コノウタニハ、心ミナコトバナアラハレテ、カクレタルトコロモミエ爪。コトバニ、カクサダカニナンヤドリハアル、トイエル、ヒサシクキタラヌヲウラミテ、タガハ爪ヤドリハアリトイヒタルヲ、ヒトハイサト、ヨメルナリ。マコトニシカアルベキコトニナム シラ雪ノトコロモワカ爪フリシケバイハホニモサクハナトコソミレ（紀秋岑）	42
③	ユキノアマ子クフルニハ、ウゴキナキイハホニハ、アダナルハナノサク、トヨメリ。ウタハカク、アルマジキコトモ、アリナドイエルヲ、風情トハイフナルベシ。	324
④	ワガマタヌトシハキヌレドフユグサノカレニシ人ハヲトツレモセ爪（八河内躬恒） トシノクレハ、マタ子ドキヌルニ、フエクサ乃ヤウニ、カレニシ人ハ、カエリキタラ爪、トナゲキヨメリ。カクモノニタグエテヒトヲモヨメル、ウタノナラヒナリ。	338
⑤	フタツナキモノトヲモヒシヲミナゾコニヤマノハラナデイズルツキカゲ（紀貫之） ヤマノハニ、ツキハイヅトヲモフニ、ミヅノソコヨリモイズルハ、フタツ月ノアルカ、トウタガヘルナリ。文章ノナラヒ、カクノゴトシ。	881
⑥	チルトミテアルベキモノヲウメノ花ウタテニホイノソデニトマレル（素性） コノウタ、詞ツヤカニ、心ヒロキ哥ナリ。ウタテトイフコトバニヨロヅコモレリ……	47
⑦	アキノヨハナノミナリケリアフトイヘバコトゾトモナクアケヌルモノヲ（おののこまち） 古今ノ戀哥ノナカニハ、コレヲ規模ノコト、爪ルナリ。後撰ニハ定文ガワガ、子ゴトノトヨメル、コレナン両集ノ戀哥ノマナコナリケル。	635

①は貫之の歌で、教長は「ウタノ本トイフベシ。ヲホカタ、ツラユキノウタノアリサマニテ、カクハナ、キサトニトイヒヲキテ、ハナチルトヨメル、タシカニヨメル」と絶讃している。実際にはない事を言葉で確かめることによ
り、「花なき里」に花の残像がイメージできる。その上に「花ぞ散りける」と続けるので、幻想の上での花が散る。

定家の「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」（秋上・363・新古今）の上三句も、この貫之の歌と同じ技法で、「花」も「紅葉」も眼前に幻想的に目に浮かぶ。教長が「ウタノ本トイフベシ」と言っているように、言葉でイメージ化され、歌の世界が豊かにそこに構築される。そこに和歌の命もある。教長はその辺のところをおさえて「ウタノモト」と言い切っている。

②は「心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコロモミエ瓜、コトバニ、カクサダカニナンヤドリハアルトイエ
ル」と、①と同じく、やはり貫之の歌である。人の心は昔と変わっていないかどうか知りようもないが、昔なじみの土地は梅の花が昔と変わらず香っている……という歌で、「人」と「ふるさと」を対比させて、人の心の変わりやすさを述べている。「心ミナコトバニアラハレタル」ところを教長は評価している。

③は雪を巖に咲く花と見立てる。理知的な歌で、「アルマジキコトモ、アリナドイエルヲ、風情トハイフナルベシ。」と教長が言っているように、こういう詠風の歌は古今和歌集に多い。

④は「モノニタグエテヒトヲモヨメル、ウタノナラヒナリ」と、景と人との一体化、景色と心の描く思いとがオー
バーラップして、和歌が詠みあげられるその根本的動機を述べている。仮名序に「和歌は人の心を種として、万の
言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事・業わざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言
いだせるなり」に通じよう。

⑤は山の端から出た月と、眼前の池底に見える月とを同時に見ている趣向の面白さがあり、同時に一種の幻想世界をつくりあげている。教長も「文章ノナラヒカクノゴトシ」と言っている。①の歌と同じく貫之の歌である。

⑥は「詞ツツヤカニ、心ヒロキ哥ナリ。ウタテトイフコトバニ、ヨロヅコモレリ」と注の冒頭で述べ、以下、「ウタテ」の語釈を詳しく解説。そして、最後に不空羂索一卷の経の利益の不思議を香にちなんで述べ、その後「然則以和歌戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁。状乎大日周遍之戒香者、一春梅花之芬芳也。一色一香無非中道之故、豈此議違哉」と結んでいる。『不空羂索經』は密教經典で、御室や高野山に、出家後遁世していた教長の精神生活の反映がみてとれる。またこの時代の歌道と仏道とを結びつける平安貴族達が庶機した「狂言綺語の誤りをもつて翻して當来世々の因、轉法輪の縁とせむ」した思想も「和歌戲論之奇語、翻蓋爲菩提涅槃之良縁」という言葉で述べ、教長の和歌と人生との関係が、その決意が伺えよう。梅の香から、ここまで深い世界に思索をめぐらす教長の一面に、興味が持たれるところでもある。

⑦の小町の「秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ぞともなくあけぬるものを」は恋三に入っており、最も恋が高まった恋人達の熱い心情をうたっている。秋の夜を長いと感じるのは一人佗しく過す境遇にある者で、恋一、恋四、恋五に詠まれている範疇にある。恋三にある者は小町のこの歌の感慨にふけるのは自然で、教長自身、この⑦を「戀哥ノマナコナリケリ」と確信しているのが伺えて、彼の恋歌観というものとの反映がみえる。

以上、教長の何らかの和歌観を知る手立てとなる①から⑦をみた結果、まず貫之の歌が三首もあることに、教長の和歌に対する根本的受容態度をはかる一つの基本があることがみてとれる。「ウタノ本」と言い切っている。

教長の『古今和歌集註』の中で一番多くその歌を取りあげているのは貫之で、二六首にのぼる。

ところで、俊成は『正治承状』で教長のことを源氏みざる歌よみと批難しているが、俊成が同じ貫之の歌の中で、どれを庶機していたかをみてみたい。『古来風体抄』によると、

むすぶ手のしづくににぐる山の井のあかでも人に別れぬるかな（404）

この歌、むすぶ手のとおけるより、しづくににぐる山の井のといひて、あかでもなどいへる、おほかたすべて言葉ことののつづき姿心がぎりなく侍るなるべし。歌の本体はただのこの歌なるべし

俊成は「歌の本体はただこの歌なるべし」と言いきっている。さらに慈鎮和尚自歌合跋における判詞の中で次のように述べている。

おほかた歌は必ずしもをかしきよしをいひ、事のことわりを言ひきらむとせざれども、もとより詠歌といひて、ただよみあげたるにも打ちながめたるにも、何となく艶にも幽玄にもきこゆることのあるべし。よき歌になりぬれば、その詞姿のほかに景気の添ひたるやうなること

とある。谷山茂氏の「俊成の貫之受容の態度」（『国語と国文学』S35年6月号）によると、

俊成がこの歌から学びとろうとしたのは、内容的な面では、知的趣向的なものでなくて、むしろ感情的情趣的なものである。……貫之一般の歌風が「貫之が歌などのやうにたしかに」（顕昭古今集註）とか「貫之、歌の心たくみに、たけ及びがたく、ことば強く姿おもしろき様を好みて、余情妖艶の体を詠まず（近代秀歌）」というふうに割切れるものならば、むしろ公任の推賞した「さくら散る木のした風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」のほうが適當であり、またそういう意味では公任こそ貫之の正統的継承者であつたかもしれない。「桜ちる」の歌は、趣向も巧みにもしろく、詞づかいもしっかりと詠みすえられていて、いかにも「たしか」な詠みぶりであり、「余情妖艶の体」で

はない。それに反して俊成がこの歌を貫之の第一秀歌と認めたことは、とりもなおさず、俊成が貫之的伝統をむしろ余情妖艶の側に近づけながら、主体的に受容していることを意味するであろう」という示唆に富んだ指摘がある。

教長は、俊成の庶機した歌とは違い、むしろ公任に近い「心ミナコトバニアラハレタル」歌、理知的な歌、趣向の面白い歌を評価している。

教長や俊成が生きた平安末期は「古今集こそは歌のもとと仰ぐべき」（御裳濯川歌合判詞）、「歌の本体には、ただ古今集を仰ぎ信ずべきことなり」（古来風体抄）と、その古今集を宗とすることは絶対的な時代の空気があった。ただその受容態度が、俊成的な余情妖艶の流れと、教長はじめ六条家の庶機する流れとに大きく分かれていったといえよう。

結 び

まず、教長の『古今和歌集註』の抄出歌を従来は二百二十余首とされていたが、古典全集本により判明する和歌を教えてみると、私の調査では三百十八首となり、百首ほど多くなるのが一点である。

次に顕昭との共通歌を表に示し、その上で両者の注釈を具体的に試みた結果、多くの先学が述べられている説には、こぞつてかたよりがみられるということが第二点。必ずしも「顕昭は教長を徹底的に批難している」とはいえない。もっと謙虚に顕昭は教長の注を引用し、肯定すべき箇所はそのまま丸ごと自らの説と同化させ、否定すべき箇所も実証的にその過程をみせ、くつがえしている。また時として教長の注の方が正しく、詩情があることもある。少なくとも

も顕昭は共通歌の場合、その冒頭に教長の注のほぼ全文をひき、その上で自らの説を肯定にしろ否定にしろ述べている。顕昭にとって教長が如何に無視しえない存在であつたかが、そのことだけでも伺える。

最後に、『古今和歌集註』の注の言葉により教長の和歌観が伺えるものを幾つかみてみた。その結果、紀貫之の和歌を評価する教長の姿勢が浮かびあがつてきた。つまり最も『古今和歌集』を代表する歌人である。その中でも教長は知的趣向的な歌、「心ミナコトバニアラハレタル」歌を庶機していたことがその特徴である。教長は保元の乱で崇徳院側に一途につき、見返ることもなく、その罪に問われ、常陸に流され、その後は出家生活を送る。自身の信念、真情を貫き、時の権力に自在におもねる世渡りの術を否定し、まっすぐに生きていく。どちらかといえば直情的で一筋の人であり、俊成の生き方と対称的である。その生き様が庶機する詠風にも反映されているといえようか。

注

- (1) 藤原教長（「国語と国文学」第三十巻昭和二十八年）岩橋小弥太
- (2) 右に同じ
- (3) 初期の古今集注釈と和歌の家の展開
- (4) 『奥義抄』注釈の和歌は取り除いていることが巻二十の奥書の「大略釋「奥義外歌」によってわかる。
- (5) 一回の講座「古今和歌集」——古今和歌集の注釈史——片桐洋一
- (6) 「古今和歌集研究史」（「国語と国文学」昭和九年四月号西下経一）
- (7) 先の(5)に同じ

（にしむら ようこ 文学研究科国文学専攻 博士後期課程）（一九九五年一〇月二五日受理）

